

# 総務文教・産業建設厚生常任委員会 調査報告(台湾)

## 熊本県南フードバレー構想 「吉野梨」のアジアへの 販売戦略について

まず、我々一行は、JR九州・新八代駅にて、特産品のPR状況を確認した。驚いたことに、「工芸品」などの展示はなされていたが、「吉野梨」はもとより「晩白柚」「トマト」などの「特産品」のレプリカなどの展示は一切なかった。

出発時間が、早かったために「観光案内所」の中は覗くことができなかったが、多分、案内所の中にも展示はなされていないと思われる。

我が町では、熊本駅構内にアンテナショップとして「氷川のしずく」を設けているため、地元の新八代駅のそれには、まったく気づかずにいたが、今後、県南フードバレー構想の中で、県をはじめ八代市とともにJR九州に働きかけをしていく必要があると感じました。

一行は、この後、九州新幹線に乗車。博多駅経由で福岡空港へと向かい、同空港の出発ロビーにおいて、JAやつしろ果樹部・梨部会のほか、JAやつしろ下村副組合長、JA熊本果実連、日園連のみなさんたちと合流し、対面式を行った後に台湾に向けて出国した。



果物売り場で、他の商品と値段を見比べるJAやつしろ竜北果樹部・梨部会のみなさんをはじめ、下村副組合長や議会議員の調査団

## 台北市・「天母大葉高島屋」【9/17】

台湾に入国した後に、午後から、台北市の「天母大葉高島屋」を訪問。そこで現地のバイヤーである「ウォーカー社」の説明を受けながら、調査を実施しました。

果物の売場では、「吉野梨(新高)」の6玉入りの5kg箱が日本円にして約9,000円で売られていた。1個あたりに換算すると「1,500円」ということになる。

ちなみに、台湾産の梨は1個あたり約800円、韓国産は400円で売られていた。つまり、吉野梨は、台湾産の倍の値段であり、韓国産のその3倍の値が付いていた。

現地では、丸くて大きい「モノ」が重宝がられるという風に聞いていたが、程よい球形をした大きなサイズの吉野梨が「中秋節(ちゅうしゅうせつ)」でのお供え物として定着しているのが窺えた。

また、日本国内から大分をはじめ和歌山、山梨などの梨も出荷されていたが、断然、吉野梨への「評価」が高いことが見て分かった。なるほど、吉野梨が程よい「球形」なのに、他の梨は「径」は同じくらいなのだが、「高さ」が違う、いわゆる「カボチャ」みたいな形をしているのである。日本の気候のせいなのか？品種改良のせいなのかは不明だが、とにかく「吉野梨」の形は、かなり見栄えが良かったのである。

ほかに、日本からは「林檎」、「桃」、「葡萄」などが輸出されていた。ちなみに、青森のどこかの首長などは年に12回程度、台湾に出向いているらしい。それほど、熱心に「販売促進」に取り組んでいるらしい。

極めつけは岡山の「マスカット」で、一房が1万円程度で販売されていた。とにかく、台湾にはブドウはあまり出回らないそうである。



## 台北市「台北第二果菜批發(卸売)市場」【9/18】

「吉野梨のアジアへの販売戦略について」に関する調査の2日目は、早朝より台北市内の濱江にある台北第二果菜批發(卸売)市場を視察しました。

市場では、豊富な果物や野菜などバラエティーに富んだ品々が陳列されており、当然のことながら、日本から輸入された「梨」や「桃」、「葡萄」、「林檎」など、ありとあらゆる果物が並んでいましたが、地元産のものもかなり並んでいました。地元産は品質的には、まだまだ日本の農産物に比べれば劣っているように見受けましたが、並べられている種類の豊富さなど日本では見ることができない物も多く、今後、栽培技術の向上や出荷規格が向上すれば、日本に向けての輸出も増えてくるのではないかと感じました。

ここでは、吉野梨のほかにも日本の大分、鳥取、和歌山、山梨、そして韓国産や地元・台湾の梨などが陳列されていました。

地元・台湾産の梨は「雪梨」という名称で、果実の大きさも「新高」と大差ないものが並んでいました。それでも、店頭での価格は「吉野梨」の2分の1の価格になります。

